

学位論文題名

対話とアポリアーソクラテ斯的探究の対話としての構造

学位論文内容の要旨

序章

ソクラテスの対話篇はつねにアポリアに終わる。もしそれが何らかの学説の論証と提示を目指しているなら、それがアポリアに陥ることは探求の挫折を意味する。しかし、ソクラテスの対話はたんなる言説の吟味ではありえない。ソクラテスとの対話が「神からの贈り物」であるのは、ソクラテスを受けとめることによって、我々が自分の知の思いなしとその傲慢さから解放されるからである。それゆえ、それは同時に対話を行う人自身の吟味の間である。「私わが吟味するのは、何よりも言論そのものだけれども、しかしそうすることによって、おそらく、質問するほうのこの私も、答えるほうのあなたも、ともに吟味を受ける結果になることでしょう。」プラトンの対話篇に描かれた探求は、孤独な思索の軌跡ではなく、問う人と答える人、その対話の場に臨む人々が織りなすその都度の思考の運動である。ソクラテスの対話による探求には、それに触れる者の生が刻印されている。しかも、この探求がアポリアに陥る。本稿の目的は、このようなソクラテ斯的探求の「対話として構造」を明らかにし、ソクラテスの探求がアポリアに陥ることの意義を対話の展開に即して読み解くことである。

第一章 根源的な探求

第一章は『ラケス』前半の分析から、リュシマコスやラケスやニキアスなどの対話者たちが、言論の信頼性を、その言論の内容よりもその言論を主張する人の信頼性によって判断しようとするなど、言論を言論そのものとして扱うことを避けようとしていることを指摘し、ソクラテスはそのような対話者たちを、言論の意味を直截に問う「より根源的な考察」へと導くことによって、彼らの思想の内的矛盾を彼ら自身に自覚させる地平を準備したと論ずる。ソクラテスの対話が、日常の惰性的な言語使用の被覆を剥ぎ取る働きをもつことを、ソクラテスの外見的には誤謬推論とも見える論駁過程を綿密に追跡することによって解明している。

第二章 ソクラテスの対話相手であること

まず『プロタゴラス』の中に、詩を解釈する言葉と哲学的対話の言葉の間の位相の違いを析出する。詩の解釈では詩人の意図がどこにあるかが問題になるが、ソクラテスの哲学的対話では自分自身の意見が問われる。ソクラテスがソフィストとの対話において、その位相の違いをいかに橋渡しし、いかに乗り越えていったか。言い換えれば、擬似対話から裸の対話へという語り方の移行をいかに遂行したかを、対話の進行に密着しつつ説得的に解明してゆく。

次の『リュシス』は、ソクラテスがリュシスとメネクセノスという二人の少年を相手に「友だち」とは何かを話題とする対話篇である。田中氏は、この二人の少年が対話の進行にともなっていくに変化してゆくに注目する。しかも、ソクラテスはリュシスに対する時とメネクセノスに対する時では、語り掛け方を変えていることも見逃せない。ソクラテスは必ずしもいつも論理的に相手を反駁するとは限らない。その論駁を、だれを相手に、いつ、どのような形で始めるならば、その効果を最も発揮するかを心得ている。

第三章 ことばの力

『ゴルギアス』に登場するソクラテスの相手は、弁論家ゴルギアス、その弟子ポロス、辣腕の政治家カリクレスである。彼らいずれも強かな利己主義者であり現実主義者である。なかでも、最後の対話相手であるカリクレスは、弱肉強食の自然至上主義を主張する過激な思想家である。本論文の分析のメスは、彼の議論を俎上に置くととき最も鋭く冴え、このカリクレスが過激な言論の主唱者であるに止まらず、言論そのものの否定者であることを剔り出す。そして、ソクラテスによる論駁がカリクレスの生き方と、彼の人としての在り方を崩壊させることを明快に論証する。

第四章 「何であるか」の問いを語ることばの在りかた

『国家』はプラトン中期の作品であるが、その第一巻はそれ以後の巻からの独立性が強く、初期対話篇と同様にソクラテスの対話の典型を示すと見なされている。本章は、ここに登場するケパロス、ポレマルコス、トラシュマコスの三人の語り方を分析し、彼らの語り方と彼らの人としての在り方が相即不離であることを証明する。ケパロスの「正義」についての語りには、自己一身への配慮のみがあり、ポレマルコスの「正義」の語りからは、彼の関心がただ行為の結果のみにあって、行為の目的に盲目であることが露わになる。これに対して、トラシュマコスの「正義とは強者の利益である」という説は、何よりも「事実」を重んずるように見せかけながら、じつは彼がたんに偏狭な「似非知」の信奉者にすぎないことが暴露される。その上で、田中氏は『国家』第二巻以後に展開される哲学的探求の語り方を、それ以後の対話者の語り方との対比によって浮き彫りにすることを試みている。

第五章 アポリアの意味

『メノン』はプラトンの初期と中期に位置する作品であり、プラトンはここで「ソクラテ斯的対話」の総ざらいを試みたと見ることができる。対話の主題は「徳」についてだが、プラトンの問題はソクラテスの「無知」と「知」の可能性の関係にあると見られる。ここで、田中氏はつねにアポリアに終わるソクラテスの対話の存在意義を問う。田中氏によれば、むしろ対話者の間で対話が成立するのは何故かが、まず問われなければならない。対話が成立しなければ、アポリアさえも成立しないからである。対話を成立させるのは、名指しと同意による了解である。ここに知の可能性がある。しかし、それはいわばアポリアの認識可能性であって、知識（学説）の習得ではあり得ない。「探求することとは、全体として想起なのであり、それは探求の挫折と見えるアポリアから出発するのである。」これがテキストから必然的に帰結することを、田中氏はこれまでの先行研究に対抗して説得的に論証している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 坂 井 昭 宏

副 査 教 授 新 田 孝 彦

副 査 助 教 授 千 葉 恵

学 位 論 文 題 名

対話とアポリアーソクラテス的探究の対話としての構造

本論文の独創性は、ソクラテスの対話の進行過程における対話者の語り方の変化に注目し、これを組織的に分析したところにある。この作業は、対話という独自の方法によったソクラテスを研究対象とするとき不可欠の作業であるにも関わらず、従来の研究では断片的散発的な言及に止まっていた。本論文における著者田中氏の試みは、新たな問題領域を切り開いたという意味で積極的に評価できる。同時に、本論文はソクラテスに何らかの学説を帰することを一切拒否するが、こうした視点は今後多くの論争を呼び起こすものと考えられる。

他方、本論文各章で取り扱われた各対話編の分析と解釈はきわめて精緻かつ独創的であり、それ自体が極めて高い評価に値する。たとえば、ラケスの「勇気とは魂の何らかの忍耐強さである」という答えに、ソクラテスは思慮を徳、無思慮を悪徳として規定して、ラケスから彼の修正された答え「思慮ある忍耐強さ」を導き出す。さらに、ソクラテスはこれに対して思慮を知識や専門技術と同義と規定して、「思慮を欠きながら危険を冒す人は勇敢な人である」という回答を導き出す。これはまさにアポリアであるが、従来の解釈では、この箇所におけるソクラテスの一連の議論はラケスの二つの答えに対する別個の論駁を構成し、同時にソクラテスは「思慮」を二義的に使用しているが、これはラケスの「思慮」理解が不十分であることを示す、とされていた。

しかし、この解釈が正しいなら、ソクラテスは「思慮」という言葉の二つの意味を操作し、ラケスを不正にアポリアに導いたことになる。しかし、田中氏によれば、ソクラテスの議論は全体として一つの論駁を構成し、ラケスは思慮の有無に関わらず、「それらがその状況においてそうであるのが正しいと判断されるかぎり、それは勇気の証明となる」と考えているかぎり、そこに矛盾はない。しかし、ラケスには勇気の有無に関する個別の判断と、勇気について語る言説とを架橋する術がない。それゆえ、それに一般性をもたせようとする、上述のアポリアに陥らざるをえない。ここから、田中氏はラケスが論駁されたのは「思慮」に対する理解の不十分さからではなく、個別の判断と一般的言説との間の断絶を解消できないからであると結論する。

また、ソクラテスは『ゴルギアス』篇で(1)「不正を行うことは、不正を受けることよりも悪い(損害になる)」という有名な詭弁的主張を論証しようとする。すなわち、(2)前提1「不正を行うことは、不正を受けることよりも醜い。」(3)前提2「美しさは快楽と善によって定義され、

醜さは苦痛と損害によって定義される。」(4)「二つの醜いもののうち、一方がより醜い場合には、苦痛あるいは損害によって勝っている。」(5)「不正を行うことは不正を受けることよりも醜いのは、苦痛によって勝っているか、あるいは損害によって、あるいはその両方で勝っているからである。」(6)前提3「不正を行うことは苦痛によって、不正を受けることに勝っているのではない。」(7)「不正を行うことは不正を受けることよりも、損害によって勝っているのより悪い。」

従来、この議論には二つの難点が指摘されてきた。第一は、「醜さ」の定義に関して限定条件の操作がある、という点である。ポロスが前提1に同意したとき、この「より醜い」を「社会の人々から見て醜い」という意味で理解していた。他方、前提3の「苦痛」は当事者にとっての苦痛であって、こうしたソクラテスの限定条件の操作を見逃したからポロスは論駁された、というのである。第二は、快苦の判断に関して前提2と前提3の間に限定条件の操作という点である。つまり、前提2では快苦の判断が「眺める人」という条件下でなされるのに対して、前提3では「不正を行う人」「不正を受ける人」という当事者に関してなされている。ポロスは「不正を行う人は、(眺める人にとっては恨みや嫉みという)苦痛の点で不正を行う人よりも勝っている」と反論し、(7*)「不正を行うことは不正を受けることよりも、損害によって勝っていないので悪くない」と主張するなら、論駁されることはなかった。したがって、上述の二つの難点が克服できないなら、ソクラテスの議論は彼自身の策略とポロスの無能に依存するから、論証として妥当性ではないことになる。

こうした定説的解釈に対して、田中氏は第一にポロスが前提1に同意したのは、ポロスの生の在り方のゆえであると指摘する。ポロスの理想は弁論家として成功することであり、そのためには大衆に迎合し「法と慣習」に従って前提1を受け入れざるをえないからである。前提3に関しても同様である。不正行為を問題にする際、何よりも当事者に目を向けるのが当然であり、不正を受ける人は不正を行う人よりも多くの苦痛を受けるから、「法と慣習」は不正を行う人に刑罰を与え、正義を回復しようとするのである。したがって、難点1は解消する。前提1と前提3の間には限定条件の不正な操作は存在しないからである。

第二の難点に関しては、前提2のいう快苦の判断は、必ずしも「眺める人」に限定されない。むしろ、ある行為についてその快苦を判断するのは、それを外から眺める人ではなく、その行為の当事者である方が自然であり、ソクラテスの例証においても「眺める人」に特定されない。むしろ、ポロスはこれを「眺める人」に限定して、ソクラテスに反論することも可能である。しかし、ポロスはこの方策を採用できない。ポロスが弁論家として生きようとするかぎり、「法と慣習」に従って[前提3]「不正を行うことは苦痛によって、不正を受けることに勝っているのではない」を認めざるをえないからである。

ここから、田中氏は以下のように結論する。ポロスに残された道は二つに一つである。弁論家としての彼の生き方を規定している「法と慣習」という社会規範への支持を取り下げるか。あるいは、論駁を受け入れ、不正行為による成功者の道を断念するか。本論文において、田中氏がソクラテスの対話は相手の生き方を暴露するというのは、じつにこうした意味においてである。

以上、第一章のラケス論駁と第三章のポロス論駁の概要を紹介したが、第二章リュシス論駁における「第一の友のアポリア」の解明、第三章のゴルギアス論駁と第四章のポレマルコス論駁等に関しても、同様の精緻なテキストの読解と独創的な解釈の提示が見られる。これらは、いずれ

もプラトン初期対話篇の研究に独自の貢献をなすものとして高く評価できる。

以上のような理由に基づいて、本審査委員会は全員一致で本学位申請論文が博士（文学）を授与するにふさわしいという結論に達した。